



第137号

2022年12月20日発行

千葉大学教育学部
同窓会
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33



就任に当たって

同窓会会長 八木 雅之
(S 44・3卒 旭市)

正に青天の霹靂、「何が、つて？」それは、小生の会長就任である。すでに後期高齢者、同期の仲間には「あいつに務まるのか」と心配をかけるに違いない。

今は開き直るしかあるまい。幸いにして副会長はじめ、理事の方々や事務局スタッフには恵まれている。まさしく天の配剤だ。彼らを頼りに頑張ってみようと覚悟した。同窓生各位の温かくも厳しいお力添えをお願いしたい。

町田前会長が、先頭に立って進めてこられた母校の創立百五十周年記念事業は、コロナ禍の制約を受けながらも、強い意志と会員各位の御協力により無事終了することができた。次の課題に向けて走り出さなければならない。今考えていることは次の三点である。

まずは、財政基盤を確立していきたい。実情を説明しよう。現在、会が行っている事業等にかかる経費は年約

五百万円である。それを賄う原資にあたるのが入学生の納める終身会費なのだ。ところが、少子化に伴い入学定員が減少し、現在は四百名を下回る。(十年前は四百七十名余であった)当然のことながら不足額は補填しなければならぬ。現在は積立金を取り崩している。今後、入学者数の増加は見込みにくい。

そこで、考えられるのは終身会費の値上げである。関東近県の大学の中でも本学は安いほうだ。しかも支出すべき事業の中心は後進の育成・支援である。現在実施している教職サポートルームの相談活動や教員採用対策講座も評判が良い。いわば、出資への還元がなされているといつてよいだろう。是非御理解を賜りたい。

次に、事業の充実・強化である。幸いにも、百五十周年記念事業の目玉ともいえる後進の育成に係る資金援助に

紙面紹介

特別寄稿	5面
教育学部創立150周年を 迎えて	2~4面
学校現場から	6面
学校現場へ	7面
会員のいきいきだより	8・9面
私の学園生活	10面
私の趣味アラカルト	11面
支部だより	11面
定期総会の概要	12面
功労者・永年勤続者からの メッセージ	13面
役員紹介	14面
物故会員	14面
編集後記	14面
創立150周年記念事業 寄附金一覧	15・16面
事務局より	16面

ついて、総会で承認がいただけた。来年度から具体的な動きが始まるだろう。加えて、本会の基盤ともいえる支部活動に対する援助も充実させていくつもりである。

三点目は、執行部を支えてくださる理事(常任理事を含む)の方々との連携を一層深めることである。例えば、過日の理事会でもK氏やM氏といった学校関係外の理事の方から貴重な示唆をいただいた。本学で学んだ仲間が社会全般に活躍の舞台を持つことは本会の広がりにも他ならない。今後も執行部の考え方や方針を丁寧に説明し、十分な理解をいただけるよう、会の運営に気を配っていききたい。

前に述べた百五十周年記念事業の概要は、本号の二ページ以降に掲載されている。百五十一年目のスタートを担当させていただくことに誇りを持ち、微力であるが、頑張っていきたい。重ねての御支援・御協力をお願いし、就任の辞とさせていただきます。



副会長就任に当たって

岡村 太郎
(S 47・3卒 千葉市)

私はこの十一月に、後期高齢者の仲間入りとなる。

若い頃の不摂生な生活を思えば、よくぞこの歳まで生きてこられたものだと、その幸運に感謝の日々である。

それにつけても、ここに至って念頭にあるのは「終活」への思いである。世間のあらゆる役職から解放され、自由な身になりたいと願っていた矢先に、同窓会副会長の推薦をいただいた。

副会長は常任理事から選出するとの慣例があり、私が千葉市在住で大学に近く、何かと便利であることが推薦理由と伺った。

頼まれると断れないのが私の最大の欠点である。これを最後と心に決めて、務めを果たす所存である。



千葉大学教育学部創立 百五十周年記念事業実施の御礼

百五十周年記念事業会 会長 町田 義昭
(S 41・3卒)

千葉大学教育学部は令和四年に創立百五十周年を迎えました。

これに先立つ令和元年十一月、小宮山伴与志学部長のリーダーシップのもとに教育学部創立百五十周年記念事業会が発足し、樋口咲子推進委員長を中心として七つの部会からなる事業推進委員会ができました。財源の確保が重要ですので最初に活動を始めたのは募金部会です。折悪しく新型コロナウイルスの影響を受け、組織的な活動が思わしくない状況でしたが、多くの方々からの御協力により活動のための資金も集まりました。御協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

それぞれの部会は大学の先生方を部会長に、大学・同窓会等の皆様がスクラムを組んで積極的に活動し、計画された各事業も順調に実施されました。それらの集大成として記念式典を挙げることもできました。

式典は新型コロナウイルス第七波の不安の中、令和四年十月二十二日(土)、来賓として、千葉大学学長代理理事・副学長中谷晴昭氏、学外からは、

千葉県知事熊谷俊人氏、千葉県教育委員会教育長富塚昌子氏、千葉市長神谷俊一氏、千葉市教育委員会教育長磯野和美氏をはじめ多くの市町村教育長の方々の御臨席を仰いで、けやき会館会場で盛大に行われました。

事業は、令和五年から十年間の予定で行われる教員養成支援事業のみとなりました。これまで御多忙の中記念事業に携わり成功に導いていただいた全ての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます「ありがとうございます」。

千葉大学教育学部は次の節目、創立二百年・二百五十年に向けて発展を繰り返しながら、力強く歩んでいくものと思われれます。私自身はその結果を体感できませんが、将来が楽しみであり、大きな期待を寄せずにはいられません。

最後に、この歴史に残る記念事業の完遂に向け御努力をいただいた教育学部事務局の川名氏、同窓会事務局の水野氏・佐藤氏など関係者の皆様に、この紙面をお借りして御礼を申し上げます「御苦労様でした」。



この五十年、これからの五十年

教育学部長 小宮山 伴与志
(S 56・3卒)

今、千葉大学教育学部百年史を開いています。そこには、明治から昭和にかけての教育学部の激動の姿が克明に記録されています。明治五年九月の印旛官立学舎開設から始まり、明治六年に開設された千葉小学校では、優秀な教員の深刻な不足から千葉師範学校が創立された経緯等等。また、世界、日本そして千葉県における急激な社会情勢や財政状況の変化や戦争に飲み込まれながら、教員養成の理念や仕組みが変容していく姿が刻み込まれています。

さて、この五十年、さまざまな教育改革が行われてきました。それは、「臨時教育審議会」にはじまり、「教育改革国民会議」、「教育再生実行会議」が設立されました。そして本年、「教育未来創造会議」が発足しました。いわゆる「ゆとり教育」もこれらの教育改革の支流の一つでしょう。これらの教育改革の理念と施策は功を奏したのでしょうか？もしそうであれば、児童生徒の学力低下、いじめ、不登校の増加に加え、また、最近のグローバル化、データサイエ

ンスやAI分野における世界の潮流への乗り遅れという日本の現状をどの様に考えればよいのでしょうか？付言すれば、国立大学の独立法人化以降、日本の研究力低下は下落の一要因をたどっています。我々が今なすべきことは一体何でしょうか？思うに、現在世界の最先端で起きていること、ならびに歴史を確実な証拠に基づいて広範な視点から詳細に分析し、未来を予測して人材育成に必要な対策を十分に準備し、実行することでしょう。国力そして科学技術の

発展の源泉は教育です。そして、良き教育は人、すなわち教師によってなされるものです。このことを念頭に置き、必要な投資を行い、将来に備えることが肝要でありましょう。教員採用試験の低倍率、教員の仕事ブラックと言われていること、教師不足が叫ばれる中、教育学部がその使命と本質を見失うことなく前進し、五十年後に上梓されるであろう教育学部二百年誌に、後進たちの活躍の姿が映し出されることを大いに期待しています。

に期待しています。

記念事業の紹介

記念式典

秋日和に恵まれた令和四年十月二十二日(土)、けやき会館にて、教育学部創立百五十周年記念行事が千葉県知事熊谷俊人氏をはじめ約三百人の参加で挙行された。

多くの来賓、招待者の御臨席の下、第一部の記念式典が厳粛な雰囲気の中、開会した。

町田事業会会長、小宮山学部長の挨拶に続き、来賓祝辞では、千葉県教育界の発展への長年の貢献に対する感謝と、今後のグローバル社会において活躍できる人材育成に絶大な期待が寄せられた。続いて、記念事業を紹介するDVDが上映された。約四年間に及んだ七部会の活動の映像から、学部、後援会、同窓会、現役学生が一丸となって



取り組んだ様子が見え、子供がうかがわれた。特に、記念彫像と教育学部歌の制作に御尽力いただいた方々への学生によるインタビューでは、

子供も大人も共に学び合

い、健やかで平和な未来を切り拓いていこう

という強い願いを感じ取る

ことができた。

最後に、教授・学生有志十五名による教育学部の歌「小さな大人大きな子ども」が披露された。教育に携わる全ての人々と共有していきたい歌として、教育実習の最中、一生懸命練習したとのこと。美しく凛とした歌声が、静まり返った会場に響き渡った。

第二部の記念コンサートは、千葉大学吹奏楽団、千葉大学・コンフォール室内合奏団と教育学部生により、躍動感あふれる感動的なステージとなった。マツケンサンバやわらべうた、秋の童謡など、選曲や構成に温かな心配りが感じられ、有り難く思った。



作詞 谷川俊太郎 作曲 山本純ノ介
千葉大学教育学部の歌披露

(文責 小笠原真理子)

「流れる雲」除幕式

五月八日の朝は、薄曇りだった。内心、会場の準備中も心穏やかではなかった。天候の急変も予想された。が、式典の時刻が近づくと、靑空が垣間見られるようになった。

いよいよ除幕の瞬間。覆っていた幕がふわっと浮き上がり、次の瞬間には流れるように滑り降りた。

そこには母親に抱かれた幼子が現れた。折しも今日は母の日だ。

その後、像の前では幾人もの参加者が、記念写真を撮られた。

印象的だったのは、制作者の母と思われる方の姿だった。和装で像に見入る姿からは、息子の作品

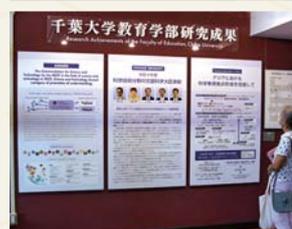


「流れる雲(制作者 廣川政和)が、出身大学のこの地で、幾星霜の間、その姿を留めることを、穏やかに祝福しているように見えた。



「壁面ギャラリー」参観

教育学部一号館の正面左側の入り口。「師道」の碑と「流れる雲」の彫像を左右に見て入った所に、展示されている。



教育学部の歴史だ。事柄は文字を追えば分かるので、ここでは、見えない部分について記す。

この五十年間で最も大きな出来事だったのは、「国立大学の法人化」だ。これにより、大学も同窓会も劇的に変わった。

学部存続のために就職採用数を上げねばならず、また企業と連携して産業に貢献せねばならない等のことは、創立百年時には考えられなかったことで同窓会も、学生支援の必要性に迫られた。当時の同窓会事務局にある会報のバックナンバーを読むと、当時の学部の苦悩がよく分かる。是非、一見してほしい。

(文責 林 廣明)

記念事業に携わって



創立百五十周年記念
事業推進委員長
樋口 咲子

十月二十二日の記念式典で、一連の記念事業が一段落しました。これまでの同窓会の御支援に、心より御礼申し上げます。

今年度に入り、ここ数年にわたる記念事業会の取り組みが次々と目に見える形となりました。新緑の美しい五月には記念彫像の除幕式が執り行われ、九月には壁面ギャラリーが完成し、十月には同窓会編と学部編とが合本となった記念誌が上梓されました。その他にも教育学部の歌の制作、記念切手シートの作成などの企画が出され、実現のために一丸となって努力を重ねてまいりました。

振り返ってみると、事業会を立ち上げ、組織作りをし、事業内容の方向性を確認し、具体的な事業内容を決定した頃が懐かしく思い出されます。これほど大きな事業を、多くの方々と関わりの中で成し遂げることができたのか。当初は不安ばかりでしたが、町田会

長と水野事務局長の舵取りで、綿密な会議や打ち合わせが設定され、部員間の親睦も深まり、ともに推進していく意欲が高まりました。各部会は教員と同窓会員とで構成されましたが、和気あいあいと仕事ができましたのも、同窓会の皆様の精力的な取り組みに助けをいただいていたこそのものでした。

記念誌や壁面ギャラリーの年表の作成では、同窓会室に整然と保管されている多くの資料にも助けられ、大いに活用させていただきました。教育学部が歴史を積み上げていくことを大切に思い、記録を残してくださいといる同窓会に、改めて感謝の念を抱いた次第です。

本事業会のもう一つの大きな目的は、教員養成支援事業にあります。今後十年間にわたり、多額の予算編成を行い、学生に対して効果的な授業や講座が編成されます。本件に際しても、同窓会には多大なる御支援をいただいております。共に教育学部の歴史を積み重ねていくパートナーとして、今後も引き続き、御協力の程どうぞよろしくお願いいたします。

『三六会』を立ち上げて



(S36・3卒
千葉市)

岡田 義一

千葉大学教育学部創立百五十周年記念をお祝い申し上げます。

この事業に『三六会』が団体として寄附できましたことを喜ばしいことと思っております。

一九八〇年六月七日、三六年期会総会を千葉市内のクラマンホールにおいて開催しました。参加者は来賓の恩師七名と会員七十四名でした。協議や懇談を進め、最後に恩師を囲み集合写真を撮り、閉会としました。この時から会の名称を『三六会』としております。会の目的については、初代会長である落合護氏の挨拶文(抜粋)を紹介いたします。「みなさんは中堅となつて活躍していることと思えます。今日を機会にそれぞれの立場で情報を交換し、助け合い、友愛を深めてゆとりある充実した生活への場作りに発展させようではありませんか」と述べております。その後、総会は毎年開催いたします。恩師に講演をお願いしたこともありました。清水馨八郎先生

からは「人間とは何か？」の講話をいただきました。武内和夫先生は御自身で描かれた油絵を配られました。

一九八二年八月から毎年本会は市原市を会場に、宿泊懇親会を養老溪谷で開催し、その際、笠森観音、チバニアン、養老溪谷等の散策もしました。

一九八五年、会員名簿が完成し、二六一名の住所等の確認ができました(不明者十五名)。

一九九四年、思い出のアルバム(A4版32ページ)、出会いそして今感動が完成し、配付しました。

近年は総会の場所を集まりやすい千葉市とし、開催日を毎年三月六日としております。

二〇二〇年。コロナ禍のため、第四十回総会を延期しました。今後の状況をみて、現会長、松盛弘氏と共に活動を続けていきます。

本会は教育学部同窓会の存在によって成り立っております。同窓会があるから本会も存在すると思えます。

本会は他県や他地域の情況、教育界の課題等を把握する活動をしています。同期生の動静を知る上でも立ち上げて有意義であったと思っております。

特別寄稿



「フゾク」

小説家 藤野千夜

(S60・3卒)

純文学というジャンルの小説を書いている。何が純文学かというのは大変難しく、はるか昔には、その定義を巡っての論争なんかもあったそうだけれど、今では大体のところ、暗くて理屈っぽくて、売れていない小説をイメージする人が多いかもしれない。でも実際は、明るくてバカバカしくて、やっぱり売れていない小説の場合もある。また、売れる純文学というものも、あるにはあるようなのだけれど、それは遠くの方でしか見たことがないので、詳しいことは知らない。

私が書いているのは、ちまちましてなにも起こらず、ちよつと恨みがましい小説だ。もちろん売れることはめつたにない。



九歳から十歳にかけて千葉市内、京成稲毛駅の近くに住んでいた。昭和四十年代後半、まだ市内に「区」なんてなかったころの話だ。横浜から転校してきた私が、

校庭でボール遊びをするクラスの子らに、「まぜて」と勇気をふりしほつて声をかけると、一瞬の沈黙のあと、ドツと笑われた。「まぜるのは液体だけだよ」

ひとり利発そうな男子が近寄つてきて、親切に教えてくれた。私は特に反論はせず、まぜるのは液体だけと胸に刻んだから、半世紀経つた今でもその言葉を良く覚えている。そういう場合、この地では「入れて」と言わなければならなかつたらしい。

また、その学校ではテストの成績が少しい子には、「フゾクに行くの？」と訊ねる習慣があった。私もちよつと成績がよかつたので、クラスの子やその保護者の方から、何度かそう訊かれた。ただし、フにアクセントのある「フゾク」がなんのことかよくわからず、曖昧に首をかしげていた。やがてそれは地元の名門中学校を差すらしいとわかつたが、あいにく私は小四のおわりにまた横浜に転

校したから、その名門「フゾク」に行くことは叶わなかつた。

一浪して千葉大に入ったのは十九歳のときで、むかし市内に住んでいたと懐かしみつつ、四年間ずっと横浜の自宅から通つた。往復三時間半ほど。電車内での時間つぶしの本は必携で、純文学、少女小説、SF、ノンフィクション……手当たり次第読みまくつた。手持ちの本を車中で読み終わりそうだと判断すれば、乗車前、必ず次の一冊を準備した。

大学では、教育学部の中学校社会科専攻、通称「社専」で学んだ。一学年十人だけの専攻で、四学年合わせても四十人だった。学部棟に「社専」の控室があり、時間があるときよくそこで過ごした。先輩にはよくしてもらい、後輩の面倒はあまりみなかつたが、最大でも四十人という小規模な集まりが、内気な私には心地よかつた。

四年生のとき、学部の横にある付属中学校で教育実習をした。きつとみなさんもお気づきのとおり、その中学こそ「フゾク」だった。稲毛の小学校で耳にして十年余り、地元の名門中学にはじめて足を踏み入れ、「フゾク！」と感激

した。

卒業後は教員にはならず、青年漫画雑誌の編集者をしていた。

三十過ぎにその職をなくし、なにかしなくちゃと公募の新人賞に送りまくつて、どうにか文芸誌に小説を発表することができたのは、学生時代、長い通学電車ですたすら本ばかり読んでいたおかげだろう。三十三歳でデビュー、三十七歳で幸運にも芥川賞をもらい、以後は一年に一冊、本が出るか出ないかのスタンスで地味に書きつづけ、今年六十歳になった。

母校関連からお話をいただいたのは、この同窓会報の執筆依頼がまったくのはじめてで、ようやく卒業生と認められたようで嬉しい。記念に「社専」の同期の名前を久しぶり思い出してみると、自分を入れて十人とはいえ、意外なほどすらすらと覚えて感激した。

一九九五年「午後の時間割」

第14回海燕新人文学賞

一九九八年「おしゃべり怪談」

第20回野間文芸新人賞

二〇〇〇年「夏の約束」

第122回芥川賞

学校における人材育成



丸田 峰 登
(S 61・3卒
八千代市)

創立百五十周年、おめでとうございませう。諸先輩方のためまぬ努力に支えられて現在の学部があり、自分自身もその伝統に育てられたと考える。次の世代に思いをつなげていくために、人材育成について書かせていただきたい。

千葉県・千葉市教員等育成指標と千葉県教職員研修体系が示された。具体的には、四つの柱と三つのキャリアステージとして整理され、人材育成の方針が明確になった。これにより教職員が自ら資質を高めていくことがシステム化されたといえるだろう。

しかし、校内で職員を三つのステージに合わせてみると、バランスの悪いことがわかる。特に、四十歳代の教職員が少ない。在籍校では、六年目の教員に学年主任を任せている。教員としては、ステージIIの研修を受講せずにミドルリーダーとしての役割を任されるのである。すなわち、ミドルリーダーとして活躍できる教員を

育成することは、校長の重要な役割といえるだろう。また、長いキャリアを考え、人材育成を行うことが大切である。

そのために重要なことの一つが、組織を有機的に機能させるための校務分掌であると考えられる。具体的には、学校全体に提案しなければならぬ校務分掌の主任を若手教員に任せている。その効果として、重要な役割を任されたことによるやる気の向上がある。

さらに、分らないことを経験豊富な先輩に聞くことにより、OJTの効果も期待できる。

校長としては、進んでやりたいと提案してきたことをどうすれば実現できるかを助言することに努めている。また、すぐに結果が出ることを求めるのではなく、その努力を認めていくようにしている。やりたいことを提案し、ベテラン教員に支えられて組織的に学校運営に参画していく経験は、ミドルリーダーを育成することに欠かせないと考えられる。そして、長いキャリアの中で活躍できるよう、強く願っている。

学校現場から

教師は魅力ある職業



伊藤 鉄 夫
(S 38・3卒
袖ヶ浦市)

公立諸学校の教員配置人数は、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」(以下、標準法と記す)に定められている。端的に言えば、各学校に配置される教職員は、この「標準法」によるといふことである。

ところが、新聞報道(令和四年八月四日朝日新聞)によると、十九都道府県・四政令指定都市の今年五月一日時点の教員配置状況を調べたところ、千二十人の欠員が生じていたと発表された。

欠員の原因は、現職教職員の産休・育休・病休などを取った人の補充ができなかったことであるといふ。

筆者も現役時代、各学校への教職員定数の管理と、産休・育休・病休者への代替者の配置を担当したことがあるので、この新聞報道

に驚いている。

教員の配置定数は、児童生徒数・学級数によって、きちんと決められているのである。

教職員の欠員が生じないよう関係者の方々は、努力されていると思うのだ。教育環境をよくして、よりよい教育ができるよう最善を尽すべきである。「教師」という仕事は、とてもやりがいのある職業だ。しかしながら最近では、教員の過重労働が大きな話題になり、教師を希望する若者が減っている。これ以上欠員が生じないような対策をとることが急務である。

そのためには、教員の労働条件を一日も早く改善して、多くの若者が希望するような魅力ある職業にしたいものである。

わが教育学部が、創立百五十周年を迎えるという。おめでとうございませう。

役員の皆様の努力で、記念式典、記念彫像の建立、ギャラリーの設置、記念誌の発行、教員養成支援事業の展開、募金活動等の精力的な活動を御苦勞様です。募金まだの方、御協力お願いします。

みらい分校



井上 四志郎

(S56・3卒
松戸市)

千葉大学教育学部百五十周年を卒業生の一人として心よりお祝い申し上げます。

私は現在、松戸市立第一中学校みらい分校に勤務している。県内二番目の夜間中学校として、平成三十一年四月に開校した学校である。私の定年の年と開校が一緒だったこともあり、希望して再任用で勤めることになった。

専門の「保健体育」は週一時間、主に外国籍の生徒に日本語を指導している。必要に迫られ、勉強して「日本語教育能力検定試験」に合格した。

教員生活のほとんどを中学校現場で過ごした私には、夜間中学はいい意味で新鮮な経験であった。

本校には課題もあるが、今回は本校の「特長」を挙げることで「学校現場へ」とさせていただく。

○本校の特長1「学び直し」

本校は「学びのセーフティネット」として、様々な事情で中学校を卒業していなかったり、実質通

うことができなかつたりする年齢を超えた生徒が入学してくる。

生徒はもう一度勉強したいという気持ちで入ってくるので、学習意欲は非常に高い。教師もそれに応えようと丁寧な指導し、学ぶ喜び、わかる喜びを体感させている。

○本校の特長2「多様性」

昨年まで国籍は七か国、年齢は十六歳から七十六歳までの生徒がいた。生徒はお互いの違いを認め合いながら、人の良いところを探し、人と比較せずに自分の良さを伸ばそうと努力している。

○本校の特長3「寛容性」

多くの生徒は「挫折」を経験して入学してくる。そのような生徒たちに対し学校全体で「やさしい」雰囲気を作り、安心して過ごせるような空間を作っている。

これらの特長は夜間中学ならではのものであると思っている。

私は六十歳まで「集団の中で個を鍛える」ことを重視してきたように思う。今は違うアプローチの仕方です。今後は違うアプローチの仕方で生徒に向き合っている。

未来分校は私にとっても「学び直し」の場となっている。

学校現場へ

のぞましい人材育成を



平山 孝雄

(S52・3卒
匝瑳地方)

現在、教育委員として学校教育に関わる機会がある。活動の一つとして、学校訪問がある。コロナ禍で、どの学校も学校経営に努力されていることに感心する。

教室に入ると、教師と児童生徒があたたかな雰囲気のもとで、授業が展開されている。教師が児童生徒の発言に熱心に耳を傾け、反応を見ながら、全ての子どもに声をかけます。学習目標が具体的で、児童生徒一人一人が課題解決に取り組んでいる授業には興味をそそられる。

考える時間が十分に与えられ、自己の考えを積極的に発言し、その意見に他の子が新たな考えを加える。時間経過とともに、学習目標がしだいに解決されていくことを児童生徒自らが実感できる。学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」という主旨を意識した取り組みが具現化されていることも

に、校内研究・校内研修の成果が現れていることを強く感じる。

学校訪問の際、感じることは、教職員の若年層化である。ベテラン層の退職に伴い、最近の世代交代は顕著である。管理職にとつて、若年層の資質能力の向上を目指す人材育成は急務な課題といえる。訪問した学校の中で、この課題に積極的に取り組んでいる例としては、次のようなことがあげられる。

校長の人材育成方針に基づいて、校内研究や校内研修の実施計画をきめ細かく作成する。実施にあたっては校内組織を活用し、ミドルリーダーが主体的に運営に参画できるように進める。管理職が教室訪問や授業観察により、学級経営や授業の様子を的確に把握する。若年層のよさを認めつつ、自信を持たせながら指導を展開するといったことなどにより成果を上げていく。学校規模や年齢構成により、取り組むべき方針は異なってはくるが、どの学校においても重要な課題と考える。

最後に、教育学部創立百五十周年をお祝いするとともに、今後も優秀な人材の輩出を期待する。

自分と向き合いたい



滝澤 光明

(S53・3卒
長野県)

教員生活の終わりが見え始めた頃から、高校生に向かって、私は将来このような人間でありたいと授業中に公言していた。「死ぬまで学び続けたい」「死ぬまで所得税を払い続けたい」。

六十歳の定年を迎えた年に父が亡くなり、稲作と果樹栽培を引き継ぐことになった。それまでは、適当にやっていた農業を本格的に実施しなくてはならない。生徒に公言していた手前、実行に移さなければまずいと思った。良い作物をつくるために経験だけでなく科学的な知識も吸収し、先進的な農業を実践している方に教えを乞うたり、研修会にも積極的に参加したりした。今までの教える側から教わる側になった。これがまた新鮮で良い。

次に所得税については、確定申告を行うことにより確認できる。当初は税務署に出向き苦労したが、近年はパソコン等で簡単にできるようになった。昨年は残念な

がら天候不順により所得税を払うことができなかつた。



日々の農作業は天候と自分の体調を見極めながら実践している。時々、この農作業は生徒を指導しているのと似通っていると思う。でも、いちばんの違いはダメなものは廃棄してしまうこと、作物が生長する過程で間引きすることだ。教育現場では考えられない行動を農作業では平気で行っている。これがまだ乗り越えられていないことだ。もしかしたら、急に良くなるかもと躊躇してしまう。天候による試練に対しては諦観の境地に達しつつある。

精神的・身体的に適度な緊張を保ちながら生活している。出来上がった作品を多くの方から褒めていただくことやる気が沸いてくる。これも教員生活のサイクルと似通っている。

教育学部創立百五十周年の歴史の中で、脈々と受け継がれてきたスクールアイデンティティ(学び続ける)が、今の私の誇りであり、支えだ。

今後のさらなる歴史の積み重ねと、日本の教育界への貢献を祈ります。

プログラミングと私



泉水 洋二

(S52・3卒
市原市)

私が大学の門をくぐった頃は、今のように身近にパソコンがあることなど想像もできない時代だった。教養部の物理実験で、トランジスタを使った論理回路作成の実習があり、何のことかわからないまま指示通りに組み立て、かなり苦労したことを覚えている。それがコンピュータ動作の基本原理であることは、後になってから知ったしだいである。

教育学部四階の小さな部屋に、その部屋の中ではかなり大きな顔をして陣取っているコンピュータなるものがあつた。友人の誘いで、少しばかりプログラムを作り、そのコンピュータに読み込ませては出力の結果をみるのが、私とプログラミングとの最初の出会いだった。

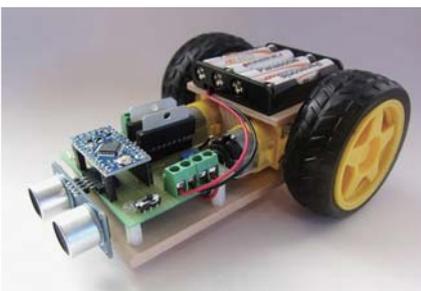
中学校の教員となって数年後、初めて個人で使えるコンピュータが発売され、やや高価な買い物だったが早速購入し、試行錯誤を

繰り返しながら、成績処理プログラムを友人と協力して作成したことが楽しい思い出になっている。次第にプログラミングの魅力にはまっていた。

定年退職後は、時間も少しかたこともあり、趣味の電子工作とプログラミングに楽しい時を過ごしているのも、今にして思えば、千葉大学での学びがあつたからこそと感謝している。

現在は、Scratch プログラミングを公民館などで小学生に教えたがり、個人的には、大変魅力的なPythonというプログラム言語に挑戦したりすることを今年一年の抱負としている。

なぜか行き着くところは、子供の頃欲しかったリモコンカーを自作してみることもなのである。



Arduino というワンボードマイコンを搭載したリモコンカー

今できることは



堀井和夫 (S47・3卒 旭市)

今年で定年後十三年目の夏を迎える。退職して燃え尽きるかと思いきや、満更でもない様々な体験をするチャンスが待っていた。

六十歳から三年間は、県教育会館で教職員向けの福利厚生事業の手伝いをさせてもらった。業務で県内の学校を訪問する機会が度々あった。お邪魔するたびに、子供たちの笑顔や先生方の熱心な指導などを拝見させてもらった。飾らない普段着の姿に「学校はいいな」「子供たちはかわいいな」と、何度も現職時代を回想させられた。

千葉県教育の土台には、このよいうな子供たちの「確かな学び」や先生方の「賢明な実践」があったことを再認識し、頭が下がった。

東日本大震災の発生後に、地元小学校区での自治会組織の会長役が回ってきた。就任と同時に、心ある役員仲間と共に「学区自主防災会」を立ち上げた。時節柄「防災組織」は住民の誰もが望むもの

だった。

私は活動の中で「学校と地域の連携」に力を入れた。会議やイベントは学校の会議室など



を借り、校長先生にも防災会の副会長をお願いした。毎年の学区防災訓練には全家庭が学校に避難し、炊き出し実習、消火訓練、講話などに参加し、夏祭り気分の半日となる。普段は学校と疎遠な人たちも、このような会の活動が顔合わせの機会になり、絆が深まっている。「連携」は、まず学校に集まって一緒に活動することから始まるようだ。

先生方は遠慮深いためか、「学校の発信力は不足気味」と言われる。私たち退職者が今できることの一つは、学校の応援団となり、学校の良さや役割の重要性、教職員の奮闘努力する姿などを、地元から地域の皆さんへアピールすることだと思う。

創立百五十周年にあたり、母校千葉大学で学ぶ皆さんが千葉県に就職してくださることが私たち同窓会員の願いである。

入学五十周年



大屋雅由 (S52・3卒 夷隅地方)

創立百五十周年、誠におめでとうございます。

千葉大学教育学部に入学して本当に良かったと思うのは、すごい先生方に学べたこと、そして、良い仲間に出会えたことである。

特に、算数・数学教育の杉岡司馬先生からは多くのことを学ばせていただいた。先生の口ぐせの一つは「一息で言ってみなさい」だった。要点を簡潔に、かつ具体的に表現することが大切だという教えである。それ以来、だらだらと話をしないように、ずっと心掛けて生きてきた。これからも、そう生きたいと思う。

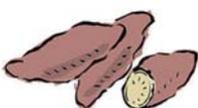
私は、一九七三年入学なので、まもなく入学五十周年になる。同級生はどうしているのか。今回の原稿依頼を受けたのは、同窓会報に載れば何人かの同窓生の目にとまるかもしれないという思いからである。数年前、西千葉駅近くの「みどり寿司」で同窓会があった。

懐かしい顔に出会うと、すぐに昔に帰れる。是非、また会いたい。みんな元気です！

書きたいことは書き終えたので後は流れるままに……。私は、公立小学校を定年退職後、私立の広域通信制高校に勤務している。現在、高校生の十四人に一人は通信制高校で学んでいる。様々な境遇にある生徒が入学してくる。誰もが高校を卒業し、社会に羽ばたいていけるように、微力ながら取り組んでいる。

家での楽しみは、畑で野菜や花を栽培することである。先祖から受け継いだ畑を自分の代で荒らしたくない、そんな思いで畑に通っている。それに、野菜や花が生長する姿を見るのは、実に気持ちがいい。

野菜を育てるこだわりは無農薬。言うのは簡単だが、所詮は素人。虫に食われたり、野生動物との知恵比べに負けたりと四苦八苦の連続。それだけに収穫の喜びは格別である。



私の学園生活

「私の学園生活」



石川 俊雄

(S44・3卒
習志野市)

創立百五十周年お祝い申し上げます。

私は昭和四十年春に高校卒業して親元を離れた。故郷から中央線で新宿駅を経由し千葉に来た。大学四年間は寮生活を送った。一・二年生は習志野市官有無番地の無名寮、三・四年生は小仲台の稲毛寮だった。知人への手紙は住所を無名寮と書いたところ驚いていた。

無名寮は、習志野騎兵隊が使用した平屋建て二棟の馬小屋と木造二階建て兵舎あった。医学部の学生は兵舎を使用した。他の学生は馬小屋だった。学生が一部屋二人で入った。寮歌の歌詞に「丘陵果てなき下総の薫風の地に集いしは故郷遠く離れ来て永久の真理を極むもの 極むもの」とある。寮生同士が故郷のことや互いに想いを語り合う生活ができたことは心強いことだった。

また、寮生の食事の世話をする食官の役を引き受けたため夕食が無料だったことは助かった。

一年生は寮に入ると先輩から学んだ。社交ダンス講習も一つだ。寮祭には近くの大学生を招待してダンスパーティーを催した。また、大学祭ではダンパを開催し、いずれも良き思い出だ。

平日は大学の授業と硬式野球部の活動、土日は襖張りクラブの仕事だった。大学に襖張りクラブがあったのは東大と千葉大だ。各家庭や商店から大学の学生課を通して注文を受け、県下各地の家庭に襖紙と道具を持ち仕事に行った。

一年生の時は先輩に学びその後は下級生を連れて行った。襖一枚の手当は百円。他はクラブの運営費として納めた。当時の大学卒の初任給は約三万円だ。金額以上にうれしかったことは、お客様が喜んでくださることだった。親元を離れている私たちにとって家庭の温かさを感じる大切な時間だった。

私の学生生活は仲間と出会い多くのことを学んだ。お陰で、その後三十八年間の教師生活は大変有意義なものとなった。親しき寮生の方とは今もお付き合いしている。

好きを追求した大学生生活

藤原 杏子

(H13・3卒
山武地方)



念願の図画工作科選修での学びは、充実した日々だった。学外演習では、合宿で港町へ油絵を描きに行ったり、地方へ彫刻作品に触れに行ったりして、教授や先輩後輩関係なく、意見を交換しながら見方感じ方を高めていった。

また、加藤修教授が中心となって結成したCHIPSでは、西千葉駅の壁画制作やつくば市のワークショップに参加した。アート活動を通して街や人と繋がっていく活動は面白かった。

当時、美術科は卒業論文の代わりに卒業制作が認められており、図画工作科選修も試験に合格すれば認められた。先輩方の卒業制作展や、多くの美術作品に触れるうちに自分もと、試験を受けた。試験は石膏のデッサンである。大学の教室で何枚も練習をした。試験を受ける仲間と、真剣に描いたり休憩でふざけたりする時間は今でもよく覚えている。教授に御指導

いただいたり、うまくいかなかった落ち込んだりしながらも試験に臨んだ。

卒業制作は、納得できるまで作品と向き合った。加藤研究室では、構想から熱心に相談に乗ってくださり、多くの知恵や視点を与えてくださった。季節が進むと遅くまで制作に取り組むことが増え、準備室で先輩が料理を作ってくれてくれたり、冬の寒い日は暗幕を毛布替わりにして暖をとったりした。同じ研究室や違う階の研究室の仲間ががんばっていることを感じながら、自分もがんばれた。美術の世界に浸れた四年間であった。



嶺岡牧を地域活性化につなぐ



川名 崇 (H8・3卒 安房地方)

十年ほど前から、嶺岡牧の再生活用のために、数十名の仲間と活動している。

嶺岡牧は江戸幕府直轄牧四つのうちの一つで、唯一その全貌をほぼ残している貴重な牧だ。西は南房総市の山田を経て東の鴨川市魚見塚まで続く嶺岡山系と南房総市柱木山を中心としたエリアからな

私の趣味



吟詠は生きる力



横内 規明 (S43・3卒 木更津市)

「シユンミン……」の声を聞いて子等がお父さんまたやってるね、と妻によく言っていた。私が三十代半ばの時である。授業と部活に夢中だった。部活を終え私と共に指導してくれた地域の方が、「詩吟をやりませんか」と誘ってくれた。以来この時からの出会いが私の人生を力強く支えてくれた。お陰様で九月には元気に喜寿

り、外周七十キロ以上に及ぶ。「日本酪農発祥の地」といわれるこの地では早くから牛乳が生産され、常に国民の健康のために貢献してきた。

この嶺岡牧で最新の酪農を行い、チッコカタメターノなどの食材を扱った店を出したり、この嶺岡の山歩きガイドをしたりしている。教えた子供たちが帰った時に働ける場を作るのが私の目標である。



嶺岡牧場

を迎えられそうである。

詩吟は丹田に力を込めて声高くうたう。漢詩には、人生の哀愁、武人の思いや哀しい歴史、人の世を生きる知恵等、種々の情感が込められている。吟詠すると心が揺さぶられ、また胸郭を大きく拡げることにより、文字通り心身の鍛練になる。日々吟詠することが生きる力の源泉になっている。



千葉県教育芸術祭

我孫子市支部

支部だより

印旛地方支部

我孫子市は県の北西部に位置し、北の利根川と南の手賀沼にはさまれた水豊かな街だ。江戸時代は、利根川を高瀬舟が行きかい、魚や木材を下ろして、江戸に陸路で運ぶ中継地として栄えた。

また、明治後期から大正にかけては、美しい景観に魅せられて、嘉納治五郎や白樺派の志賀直哉、柳宗悦、武者小路実篤等、多くの文化人が活動の拠点とし、北の鎌倉とも言われた。

このような歴史を持つ故郷に誇りを持ち、創造性と自主性を育む教育の充実を目指し、小学校で十三校、中学校六校が小中一貫教育に取り組んでいる。

我孫子支部は、現役教諭等六十人と行政職四人の計六十六人で組織している。市内教員に占める割合は、約十一%であり、県内出身者だけでなく、県外から教師への夢を抱いて本学で学び、我孫子市の教員になった者も多にいる。

支部として大きな活動はしていないが、教員養成学部卒業生としての矜持を持って教育活動に邁進していると自負している。

(文責 佐々木祐子)

令和四年となる今年度、学校現場では、コロナ禍後の教育を見据え、実施可能な形を検討し、行事の復活をし始めている。私の勤務校においても陸上競技大会・器械体操大会・音楽発表会といった各種の行事に向けた子供たちの活動を三年ぶりに復活させた。朝早くからの教育活動であるだけに教師の負担を考慮しての取り組みであるが、仲間と共通の目標に向かい努力する子供たちには、充実した日々が戻ってきたようである。

さて、印旛支部では例年、退職された先輩方や初任者を招いて総会・懇親会を開催していたが、本年も未だ多くの人が集まる時期ではないとの判断から、役員による理事会を開催し、会員へは会報の送付という形で同窓会の現状を周知したところである。

世代を超えて同じキャンパスで学んだ会員同士が直接顔を合わせて情報交換を行う日を目指し、会員の異動の状況を把握するなど組織の維持に努めている。

(文責 山下 博樹)

バトンタッチ



小高 千代子 (S 44・3卒)

同窓会の監事を九年間務めさせていただき、この度、図らずも功労者表彰の栄に浴し、有り難く思い拝受致しました。事務局の皆様を支えられてのことで、お礼申し上げます。生涯に数少ない表彰の最後です。これを機会に、次への第一歩にしたいと存じます。

顧みるに、卒業して五十余年。懐かしのキャンパスを歩いていますと、学年時代のごとく鮮やかに蘇ってきます。

私は、退職後に長く家事調停委員を務め、教育から距離を置いていました。しかし、離婚等に伴う子供の問題に接し、教育について再び考えさせられました。私の生きる力や知恵の無さに、自らの教員生活を反省する日々でした。教育の果たす役割の大きさ・責任を改めて感じさせられました。

学校教育で全てのことに対応できませんが、教員になる方には、親と共に考える力・生き抜く力を育てて欲しいと願っています。

同窓会の組織も充実し、学生支援も嬉しく思います。今後の発展を祈念し、お礼の言葉とします。

学部と共に歩む同窓会



藤田 俊明 (S 45・3卒 柏市)

教育学部創立百五十周年おめでとうございます。昭和四十年新設の教育学部養護学校教員養成課程一期生として共に祝い致します。

県立養護学校を定年退職した後、私立大学教員を六十八歳まで勤め、この間、教育学部同窓会理事として九年間、同窓会活動に皆様と共に関わることができたことに大変感謝しています。昭和五十三年までの十年間、専攻会として活動していた会を、養護学校教員養成課程同窓会として立ち上げ、卒業生の名簿作成と期を越えた親睦に取り組んできました。平成二十一年、学部に合わせて特別支援教育教員養成課程同窓会と名称変更しました。



功労者表彰・永年勤続者表彰
受賞おめでとうございました

平成二十六年、当時の課程長との間で「特別支援教育」の教員を目指す学生の教員採用試験合格率を高めたいと、対策講座を開くことを決めました。

今年も県内と関東近県の管理職経験者の会員に協力を頂き、教員採用選考二次試験対策夏期講座を開催しました。学部が掲げる「教員養成支援」の一端としてこれからも取り組んでいきます。

長いつきあひ



三宅 健次 (S 60・3卒)

この度は、母校から永年勤続者として表彰していただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

教育学部卒業後、千葉市内の公立中学校に勤務し、平成元年度より縁あって教育学部附属中学校に勤務することになりました。学部生の時に教育実習でお世話になった附属中学校に、逆の立場で関わるようになったのです。自分の後輩ということもあり、教育実習生の指導には自ずと思入れが強くまりました。教育実習で出会った後輩との関わりは、今でも自分の大きな財産となっています。

附属中学校には結局退職するまで三十年以上も勤務することになり、また、管理職になってからは教職大学院の教員として、学部とも関わるようになりました。

退職後も同様の環境で附属中学校と学部と関わっており、これほど長く、母校と関わりのある同窓生はいないのではないかと思っています。

もうしばらくお世話になります、今後とも大学及び同窓会のみましますの御発展を祈念しています。

感謝・三十六年の先に



村澤 昭憲 (S 61・3卒 長生地方)

この度は、永年勤続者表彰をいただき、誠にありがとうございます。

振り返りますと、それぞれの年代に様々な思い出があったはずですが、新型コロナウイルスへの対応が強烈過ぎて、歩んできた道のりを振り返る余裕すらありませんでした。マスク越ししか見えない表情でも、何とか子供たちの笑顔を保障したいと、試行錯誤を繰り返してきました。

私事で恐縮ですが、卒業生からの手紙に「校長先生は学校をまとめてコロナも大変な中、私たちがどうしたら楽しめるか、感染対策もしながら考えてくださって、とてもうれしかったです、小学校生活を楽しめました。」と綴られていました。退職の際に、このような言葉をいただいたことは、自分が信じて行ったことはあながち間違っていないかっただなと感じているところです。現在、「ヒューマンキャンパスのぞみ高校」で重柄校長のお手伝いを始めたことを報告し、お礼の言葉とさせていただきます。



令和4年度 役員・支部長・支部事務局長・学内理事

※印は常任理事
ゴシック体は新規

役員・理事・顧問 table with columns: 役名, 氏名, 卒年. Includes roles like 会長, 副会長, 監事, 理事, 顧問.

支部長・支部事務局長 table with columns: No., 支部名, 支部長, 卒年, 事務局長, 卒年. Lists various branches and their leaders.

学内理事 table with columns: 役名, 氏名, 所属. Lists university internal council members.

同期会支部 table with columns: No., 支部名, 支部長, 卒年, 事務局長, 卒年. Lists alumni association branches.

事務局 table with columns: 役名, 氏名, 卒年. Lists staff members.



令和4年7月 同窓会理事会

物故会員

〈謹んで御冥福をお祈り申し上げます。御遺族から掲載の承諾をいただいています。〉

- List of deceased members organized by branch: 市原市支部, 船橋市支部, 萩原市支部, 淡路, 林, 夷隅地方支部, etc.

編★集★後★記

本学部創立百五十周年を迎える機会に編集後記に筆を執らせていただくことは光栄である。▼巻頭言には八木新会長の未来に向けた同窓会の方針、町田前会長と小宮山学部長からは役員の方々への労いや将来の本学部と学生の姿が記されていた。▼どのページにも百五十周年へのお祝いの言葉が述べられている。同窓会報の編集・発行は附属小・中学校の現役職員の手により平成十五年まで行われていた。子供たちの指導の傍らであり、御苦労に頭が下がる。▼今号の「特別寄稿」は芥川賞作家の藤野千夜さんにお願ひし、二つ返事で受けていただいた。藤野さんとの連絡は情報を得てようやくとどろくことができた。昭和六十年三月に中学校社会科を卒業されている。「特別寄稿」最後の文章に「：母校関連からお話をいただいたのは、まったくのほじめてで、ようやく卒業生と認められたよう嬉し。…」この言葉に、編集委員一同、心が揺さぶられた。▼これからの編集委員一同、「読まれる」同窓会報の発行に努力する所存である。創立百五十周年おめでとうございます。(文責 古山 文夫)